

第 14 回 近くなったハイデルベルグ

梅雨が漸く明けようとしていた 2007 年 7 月下旬、次男が連れ合いとともに仙台空港からソウル経由でハイデルベルグに旅立った。1972 年生まれの彼は、二人の息子のうち筆者似で余り機転が利かないところがあり、留学を希望した欧米の幾つかの大学や研究所のなかから 2 年余りを費やして、漸くハイデルベルグ大学に落ち着いたのである。

筆者も 40 年前同じ様な経験をした。大学院修了近くになって留学したいと考えるようになり、文献等で知ったこれらと思うところ 10 ヶ所位に、自薦の手紙や履歴書、業績目録、学部長や研究所長や主任教授の推薦文を 1 組にして次々と出した。しかしながら、筆者の希望を聞き届けてくれるところはなかなか見つからなかった。2 年余り紆余曲折したが、米国東海岸から移ってきたばかりで、新しい研究室を立ち上げるためにフェローを必要としていたロサンゼルス・シダース・サイナイ・メディカルセンター胸部心臓血管外科主任部長から漸く招請の手紙が来た。

2 年間の研究生活を終える 2 ヶ月前に生まれたのが次男である。

欧米いずれの研究室でも、その研究員になって仕事をするにはそれなりの業績と技術を有していなければならないのが要件のひとつであるが、彼がハイデルベルグ大学研究員に決まったのは、最終的には現地に赴いてセミナーで自分の研究について発表し討論を行った後のことである。

ガイドブックによると、ドイツ中部に位置するハイデルベルグ市は、人口約 15 万の小都市であるが、学問・研究の町でもあり、ハイデルベルグ大学やマックス・プランク医学研究所やその他にも有名な基礎医学の研究所などがある。ハイデルベルグ大学は、1386 年創立のドイツでは最古の大学で、ドイツ語圏ではプラハ大学(1348 年)、ウィーン大学(1368 年)に次ぐ 3 番目に古い大学である。歴史と伝統あるこの大学にはこれまで世界的に著名な学者が教鞭と取り、また優秀な卒業生をも多数輩出した。卒業生からノーベル賞受賞者が 10 人ほど出ている。医学関係では、ノーベル生理学・医学賞の 2 人がいる。ワールブルグ(1853 年-1970 年)は、1931 年酸素を使わずにブドウ糖でエネルギーを作る癌細胞の性質を突き止めた功績で、またコッセル(1853 年-1927 年)は、1901 年細胞生物学とくに蛋白質・核酸の

研究成果により、それぞれ受賞している。そのほか医学以外の卒業生で有名人物にキルヒホッフ(物理学)、ヤスパース(実存主義哲学)、ゲッペルス(ナチス指導者)、マックス・ウェーバー(社会学者)などがある。

ハイデルベルグはまた、昔から学生の町としても知られており、人口 15 万程度のうち 3 万人位が学生で占められているという。留学体験記(田中 敏:ハイデルベルグより.E-会報, No.51, 2002 年 4 月)によると、食生活では食べ物の種類からいうと日本の方が食材は豊かなようで、彼の地では魚を食べる習慣があまりなく、生の魚はまずハイデルベルグでは手に入ることはないし、日本の食材を欲しいときはフランクフルトまで買い出しに行かなければならないということである。しかしながら、最近では二男からのメールによると、彼の地では食に関しては苦労しないようである。もっとも彼は、ドイツ行きに当たって鯉節までも移送荷物に加え、拙宅にあった古い鯉節削り器を持ち出していったほどの料理好きであるためかもしれない。筆者の父親も料理するのが好きだったので彼はその点では祖父似かもしれない。

ハイデルベルグは日本でもマイヤー・フェルスターの戯曲「アルト・ハイデルベルグ」でもよく知られている。小国の王子カール・ハインリッヒと酒場の娘ケティーとの悲しい恋の物語は、かつて宝塚歌劇でも上演されたことがある。またこの戯曲は昭和 20 年代の東北大学演劇部でも上演されたことがあり、先輩たちの話では、ケティー役をした女優は大層きれいな人だったということで、ロサンゼルス近郊のサウガスというところに住まわられていた。姉の友人でもあったことから筆者はロサンゼルス滞在中に家族で彼女の家を訪問したことがある。

息子の日本からハイデルベルグへの出発に当たり、西洋美術専攻の先輩から戴いた手紙には次のような「アルト・ハイデルベルグ」の詩が書かれていた。

1. 遠き国よりはるばると ネッカー川の岸の辺に 来たり給いし我が君に 今ぞ捧げんこの春の いとうるわしき花飾り

2. いざや入りませ我が家に されど去り行く日もあらば 忘れた給な若き日の ハイデルベルグの学び舎の 幸多き日の思い出を

次男のハイデルベルグでの生活は始まったばかりであるが、滞在中には一度は見回りたいたいと思っているこの頃である。

